

転生王女 は 王国の愛され 救世主

渡鳥 紫苑

Shion Wataridori

「イラスト」 綴吏

Tsuzuri

◆ ◆ ◆
The reincarnated princess
is the beloved savior
in the kingdom

登場人物紹介

サルーン

アラール連合国の
第四王子。
退屈な日々には飽き飽きしている。

ラインハルト

ミスト共和国元首の
一人息子。
常にクールで表情を崩さない。

アレクサンダー・ サン・ヴィクトリア

レイチェルの父で、
クリスタ王国の王。
民想いで、太陽王と崇められる。

エリザベス・ サン・ヴィクトリア

レイチェルの母で
クリスタ王国の王妃。
美しさと慈悲深い性格で、
民衆から愛されている。

アーサー

王宮の庭師を
務める獣人の青年。
レイチェルを常に
傍で見守っている。

テト

黒い毛が特徴の
獣人の少年。
人族への警戒心が強い。

レイチェル・ サン・ヴィクトリア

クリスタ王国の王女で、
転生前はアラサー会社員の桐生玲。
明るく元気で、食べることが大好き。

カイル・ サン・ヴィクトリア

クリスタ王国の王子で
レイチェルの兄。
政治的才能に富み、妹思いだが、
腹黒い一面を持つ。

第一章 定番になっている異世界転生

1. 異世界転生しちゃいました

異世界転生。それはもはや定番になった、アニメでも漫画でも溢れかえっている設定です。現代の日本では、自分の環境を嫌だと思っている人が多いから需要が高いのだと、ネットニュースで言っていました。

そんな定番になった異世界転生を、まさか二十八年間平凡に生きていた自分が体験するなんて思ってもいませんでした。

日本の千葉県に産まれて義務教育を終え、高校では青春を謳歌^{おうか}して、大学に行って就職して。趣味のアニメを毎週楽しんで、恋もしたりしていました。

そんな私、桐生玲^{きりゆうれい}は、仕事帰りに交差点を歩いていたら……トラックに轢^ひかれました。

一瞬の出来事で痛みも感じず、目を開けたら、見た事のない天井がありました。

あれ？ 見知らぬ天井？ これも定番ネタだと思いつつ、とりあえず部屋を見回します。

今までの日常で一度も見た事がない、洋風でゴージャスな家具があります。

病室ではなさそうなので、夢でも見ているのでしょうか？

そして私自身からは、ミルクともなんとも言えない、むぎゅむぎゅしたいような芳^{かんば}しい匂いが香っています。

夢にしては匂いがあるなんておかしいな？　と思っていると、秋葉原や文化祭でしか見た事が無い、可愛いメイド服を着た女の人が私を覗き込んできました。

うん？　さっきまで帰宅途中だったはずなのに……

轢かれた瞬間までは覚えているので……走馬^{そうま}灯^{とう}であれば、身に覚えのある物が見えそうなのに、こんな記憶は全くないです……

あるいは、すでに死後の世界とか？　そうなのであれば、想像していた死後の世界のイメージとかけ離れていて困惑してしまいます。どうもおかしい……頭の中には疑問マークが溢れています。

「レイチェル様、お目覚めですか？」

メイド服の女の人は、微笑^{ほほえ}みながら抱き上げてくれました。

レイチェル様って一体誰？

それに、成人女性である私をそんな細腕^{ほそうで}で抱き上げるなんてありえないくない？

困惑していると、自分の体のサイズがおかしい事に気づきました。

はい、どう見ても赤子……赤ちゃんの体です。

そして私が着ているのは、ヒラヒラのレースが見事に折り重なった真っ白な服で、金の薔薇^{ばら}の精巧な刺繍^{ししゅう}がされています。

肌触りもいいし、見た目も豪華です。

こんな高級な服を着た記憶はありません。とても可愛いです。

「王妃^{おうひ}様、レイチェル様がお目覚めです」

「あら、私の天使ちゃん。おはよう」

先ほどから抱き上げてくれているメイドさんが、部屋の左側に広がる真っ白なバルコニーの方に歩いていきます。天井まで届く大きなガラスが、蔓^{つる}の模様が絡み合う美しく彩られた窓枠に嵌^はまっています。

すると、超絶美人の女性の姿が目に見え込んできました。

大きな窓から差し込む太陽の光でキラキラと輝き、緩やかに波打つ金髪に、新緑色の瞳をしたアニメでしか見た事がないような外見の女性です。

彼女の服装も、私と似た真っ白なドレスで、見慣れない装いをしています。

メイドさんから私を受け取ったその女性は、微笑みながら頬に口づけしてくれました。

一瞬しか近づいていないのに、とてもいい匂いが漂^{はら}ってきました。

お花みたいな匂いをまといながら微笑む姿は幻想^{げんそう}的で、まるで物語に出てくる女神のようです。

夢だとしたら、やけに匂いがあるし、触覚もあるし少し変です。それに再度思い返しても、帰宅

途中でトラックに撥ねられた気がするし……そこで一つの可能性に思い至りました。

これってもしかして、異世界転生じゃないですか？

そう考えると納得のいく事ばかりです、

王妃と呼ばれた女性が“私の天使ちゃん”と言って抱えたのだから、自分は王女に転生したと考えました。

死ぬ事にまだ危機感も現実味もない年頃の二十八歳でしたが、突然死んでしまい異なる世界で赤子になってしまいました。

まさか、生まれ落ちたのが王族なんて……

2. 王女様になっちゃいました

それから数日。

最初は夢だという可能性を捨てきれずに、夢オチで目覚めるのでは？ と思っていましたが一、一向に目が覚める気配がないので、異世界転生を確信しました。

小説などで読んでいた異世界転生だと、最初に神様に会って何かすごい能力をもらえるはずなのに、そんなイベントは残念ながらありませんでした。

その後、異世界転生を確信してから約二年、日々の中で私は様々な知識を得る事ができました。桐生玲という名だった私は、この世界では“レイチェル・サン・ヴィクトリア”というすごく格好いい名前になりました。

黒髪の平凡顔から、ウェーブのかかった輝く金髪と、空色の瞳の美少女にいきなり進化です。ジヨブチェーンジともいいましょうか。

それにしても、まず、王女ってすごくないですか？ お母さんが王妃様、お父さんが王様ですよ。お兄ちゃんもいて、お兄ちゃんは王子様ですよ。

ちなみにお父様は“アレクサンダー”だし、お母様は“エリザベス”だし、定番の格好いいお名前前で、お父様とお母様の名前を呼ぶ度に楽しい気分になっています。

両親は名前だけではなく外見も素敵で、毎日見ても飽きません。

赤毛の髭^{ひげ}ありダンディーで、紫のアメジストの宝石のように綺麗な瞳のイケメンなお父様。

腰まで流れる輝く金髪、新緑のペリドットみたいな瞳の、女神と見まがうお母様。

お兄ちゃんは“カイル”です。カイルお兄様、またはお兄様って呼んでいます。

最初は独特の壁があって全く仲良くなかったのですが、今ではみんなが認める仲良し兄妹です。

容姿が似ているので、“太陽神の双子^{ふたご}”と呼ばれていたりもします。お兄様は私と同じ、お母様譲りの肩までの金髪に、サファイヤのような青い瞳の天使です。

ちなみにこの異世界は、前世でいえば中世ヨーロッパに似ていると思います。ヨーロッパのように大きな大陸に、大小様々な国がひしめき合っています。その一つの国に私は産まれ落ちました。なぜ異世界だと言い切れるかと言えば、この世界に魔法があったからです。

それに、魔法だけではなく他にも前世と色々違う点がありました。

食べ物や文字、国の名前……挙げたらきりがありません。

ですがやっぱり一番の違いは魔法です。

いや、もしかしたら私が知らないだけで前世の日本でも、限られた人は魔法という奇跡を使えたのかもしれませんが、少なくとも私はそんな摩訶不思議に遭遇した事がありませんでした。

でも、この世界で生きていると、前世の色んな事が魔法のように感じました。

ボタンを押すだけで、ホカホカのご飯が炊ける炊飯器や、色んな場所にキンキンに冷えた飲み物や、温かい飲み物が出てくる自販機があつて、飛行機に乗れば誰もが空を飛んで大陸間を移動できるなんて、この世界の文明のレベルからしたらそれこそ魔法みたいですよ。

この世界で魔法の存在に気づいたのは、偶々でした。

小学生の時、帰り道で雨が止んだ後、傘を振りながら風の魔法を使う妄想をしてよく遊んでいました。

この世界で赤子になってしまつて暇なため、ゆりかごの中で同じように風が舞っているのを想像していると、お母様の髪が風で花が開いたみたいに舞ったので、とても驚きました。

最初はただの偶然かと思いましたが、それ以降も、冷めた紅茶を温めたり、暑い日に冷房をイメージして冷気を部屋中回してみたり……

そうやって小さい事象から検証していった結果、自分に不思議な力があるとわかりました。

でも、メイドさんが茶器を浮かせて持ってきたり、誰かが空を飛んでいた……といった漫画などで読んだ不思議な光景を見る事はなかったので、なかなか確信が持てませんでした。

そこで、ある時、お兄様に魔法について質問しました。

「お兄様、この世界に魔法ってありますか？」

「あるよ。ただ、魔法は一部の人が使える未知の力で、まだ研究が進んでないだけだね」

「ちなみに、お兄様は使えますか？」

「使えるよ。レイチェルみたいには使えないけどね」

お兄様は目が笑っていない笑顔でそう教えてくれました。

「私みたいにとは、どういう事ですか？」

「君の魔法は特別なんだよ」

お兄様の言っている事が理解できなくて頭を傾げます。

「わかるように教えていただけますか？ 特別って何がですか？」

「もう少し大人になったら、君は自分でその答えがわかるはずだよ。今は気にしないで、君は君らしく特別な魔法をお使い」

優しく頭を撫でてくれましたが、それ以上の質問には答えてくれませんでした。その会話をきっかけにお兄様にはなんでも話すようになりました。

魔法は勉強してもわからない事が多いです。

とにかく、魔法を使うにはイメージの力が大事みたいです。

アニメ、漫画、妄想大好きな私は、この世界のひとと違って、魔法のイメージが無限にあるので特別なのだろうと推測しました。アニメなどで沢山の魔法を見た事があるのも、私の特別さに拍車をかけているかもしれません。

お兄様と仲良くなつてからは、他の人に話せない事も話せました。

うっかり前世の話をしてしまった時は、さすがに気味悪がるか、頭がおかしいと思うのではと恐怖しましたが、そんな心配は不要でした。

そこで安心して前世の話をしたところ、お兄様は私の話を整理して、この世界に活かせるようにしてくれました。前世の話をした後も変わらず優しく、気味悪がらずに話し相手になってくれました。

不安だった両親へのカミングアウトも上手く間に入ってくれて、私の大きな憂いだった「違う世界の二十八年分の記憶がある」という問題は、一歳になる頃には、解決しました。

それから、お兄様は帝王学^{ていおうがく}を学んでいて忙しいにもかかわらず、毎日部屋に来てくれて、私達が住んでいるクリスタ王国や、この世界の様々な事を教えてくれました。

「クリスタ王国は祖父である、セドリック王が行政改革を行って、父上が受け継いでますます発展して、今は同盟国が歴代で一番多いんだよ」

「この国の気候は一年中安定していて過ごしやすいんだよ。だから、食料も安定的に育つんだよ」

「雷が怖いなんて普通の子供みたいないところもあるんだね」

時間の許す限り様々な事を教えてくれました。

それに、お母様も忙しい中、多くの時間を一緒に過ごしてくれました。

「天使ちゃんは本当に勉強熱心ね。そんなに本ばかり読んでないで、東屋^{あずまや}でお茶にしよう」

「ねんね幼子」いとし子」天使ちゃん、歌は喉ではなく、心で歌うのよ」

「魔法はイメージが大事な。でも、魔法にばかり頼らなくても天使ちゃんは他にも沢山の奇跡の力をもっているわ」

お父様は忙しくて、中々一緒には過ごせませんでした、それでも外交で不在の時以外は、会いに来てくれました。

「天使ちゃんが笑うとみなも笑顔になる。そなたは素敵な魔法使いだな」

「天使もここにいたのか？ 久しぶりにチェスでもしようか？」

「人は奇跡ではなく、他者に頼るべきだ」

前世の記憶の話をしても変わらない、愛情溢れる家族に出逢えた事が、私のこの世界での一番のボーナスだったのかもしれない。

ただそんな日々の中で、お兄様と私が優秀すぎて命を狙われるなんていう王族らしい事が起きました。

お兄様が刺されそうなのを庇うため飛び出して私が刺された時は、さすがにお腹が痛かったです。とっさに、魔法の《防御》^{ぼうぎょ}を使えたので大事には至りませんでした。家族に危ない事はしてはいけないとこっぴどく怒られてしまいました。

その後すぐに家族に常時機能する《防御シールド》と《位置特定》^{いちとくてい}の魔法を施した指輪を作ってプレゼントしました。それがきっかけで、プレゼント交換を年に一度、お父様の誕生祭にやる事になりました。

そして、王宮で働く人の制服にも《防御シールド》を施しました。

前世とは全く異なる生活に驚きながら、この世界の理解を深めるために、お兄様やお母様から教わるだけではなく書物などで一生懸命に勉強もしました。

この世界も、人も大好きで、第二の人生を満喫していたのですが……
一歳の頃に、ミルク粥^{がゆ}を卒業してやっと大人と同じ食事を食べた時の絶望は、今も鮮烈に脳に焼きついています。

この世界で最初に悲しい衝撃を受けたのは、異世界転生定番の……食事です。

このクリスタ王国のご飯不味^{まず}すぎ問題に、初めて泣いてしまいました。

「硬いです……味しないです。この塊^{かたまり}はなんですか？」

作ってくれた料理に文句を言うなんてとても失礼なのはわかっていますが、それでも言わずにはいられませんでした。

まず、調味料の種類が少なく、味付けは塩辛いか薄すぎるかの二択。野菜、果物などは種類が少ないうえに甘くないし、主食のパンも硬くてパサパサしていました。

最上級であるはずの王族のご飯でこれなら、国民のみなさんはいったいどんなものを食べているのかと思い、すぐに調べてみると……現状を知った時は悲しくてまた泣いてしまいました。

この国は大陸の内陸部にあるので海は遠いです。川は流れているので、上流層は川魚を食べられますが、庶民は牛や鳥などの家畜を食べる事がほとんどみたいです。

主食はパンなどの小麦製品でした。

前世でもそうでしたが、食に興味のない国のご飯は、発展しないです。

日本は食への探究心がすぐく、外国の人が食べようと思わない物を食べる勇氣に溢れていて、創造性豊かです。数多くの発酵物を作り出した実績もあります。

その環境で舌が肥えていた私は、まず食文化改革に取り掛かりました。

前世ではキャベツの野生種を品種改良して、ブロッコリーやカリフラワーなどが作られたのを知っていました。だからこの世界の野菜達も、手を加えれば美味しく彩り豊かになるはずだと確信していました。

なのでその後勉強を重ね、二歳になる頃には、『食料向上化計画』をどんどん進めました。

甘い実がなる苗を沢山実をつける苗と交配させて、頬が落ちそうなくらい甘い甘い果物をお腹いっぱい食べる事を目標に日々頑張りました。

ただ、畜産業に関しては、みんなが毎日食べるからか、その需要の高さからか思いのほか発達していて、ミルク、バター、卵などはそこまで日本と違いを感じませんでした。

それでもお肉の美味しさは前世には遠く及ばなかったので、『ブランド化計画』なるプロジェクトを始動しました。

その土地で採れる植物を飼料に混ぜたり、飼育する環境を改善したりして、美味しく柔らかい、臭みの少ないお肉を作る計画です。

異世界転生の定番としては、飯テロしてご飯屋さんを開業したりしますが、私はせっかく王族に産まれたので、この国を根本から変える事を目標に取り組んでいます。

やり始めて半年で、いい感じに野菜や果物の品種が増えて味も良くなってきたので、農家さんに沢山作ってもらい、市場にも少しずつ流通するようになりました。

軌道に乗るのが早すぎりましたが、そこは異世界、やはり活躍したのは魔法です。

豊富なイメージの魔法で、植物の成長も品種改良もあつという間です。

それに加えて、私の話を聞いたお兄様が農業改革案を作ってくれて、お父様と優秀な大臣達が素早く施行してくれたお陰です。

『食料向上化計画』に励む傍ら、勉強のためと好奇心で、王宮の外の世界を見に行きたくなりました。

思い立ったら即行動の私は、家族に余計な心配をかけないために、行先をちゃんと告げてから夜眠る前の時間に、お忍びで外の世界に飛び出しました。

さすがに二歳児が外にいていい時間ではなかったので、不思議の国のアリスをイメージした『変装』という魔法で、十七歳くらいに見えるように自分の体を成長させました。

ちなみに歳をとるのではなくて、単純に外見を十七歳相当に変化させるものです。

だから、顔の造形も胸も、特に変えていません。

お母様に似て大人びた顔のお陰で、不自然には見えないみたいです。

その頃には、魔法はすっかり日常で使うまでに慣れていて、私の生活を快適で豊かにしてくれる大事な役割を担ってくれました。

外の世界は新鮮で驚きと楽しさに溢れていました。

色んな場所に行けるように、一度行った事のある場所に行ける便利な扉の魔法も考えてみました。この魔法は『ゲート』と名づけてお忍びで多用しました。

魔法って本当に便利だなと日々感謝しています。

海を見たり、他の種族に会ったり、劇団のお手伝いをしたり、人を拾ったり、裏社会の人と知り



あつたり、妖精に会つたりという異世界らしい出来事も起きたりなんかして。

子供なので、すすく育つために寝なきやいけないのに、寝る間を惜しんで外に出かけてしまいました。

お忍びの時は王女ではないので、名乗る名前も変え、好奇心旺盛な十七歳の普通の女の子である“レイ”として振る舞いました。

その影響もあつてか、お忍びでは王女のレイチエルではできない様々な経験を積みました。

あまりにもお忍びが楽しいので、ある日、王女ではなく平民として、市井で暮らしたいと言うとお母様は大泣きしてお父様からは必死に止められました。

だって、やっぱり王族って色んな枷があるし、私がしたい色んな事はレイとしてならできると思っただけですもん。

王宮を出ても家族である事は変わらないと思つたので……でも、お兄様の泣きそうな顔とお母様の涙を初めて見たら、私の考えが間違つていたのだと気づきました。あの時のお兄様の表情は今思い出しても胸が苦しくなります。

そうして最終的にお父様から取引を持ち掛けられて、私はそれを了承しました。

その後もレイとして沢山の出逢いがあつて、お忍びの中で相棒と呼べる人との素敵な出逢いもある。

りました。

相棒はアーサーといって、《ゲート》の行き先を増やすために飛行していたところ、海に浮かぶ孤島で出逢いました。

その集落で暮らすのは人族ではなく、獣人^{じゆうじん}達でした。

獣人というのは、動物の耳や尻尾を持った人達の事です。この世界では亜人^{あじん}の一種として認識されています。

亜人は複数の種族をまとめて示すもので、獣人族だったり、魚人族^{ぎょじんぞく}だったり、エルフ族だったり、それがあたります。

アーサーはそこに暮らすうちの一人で、銀色の髪に銀にも灰色にも見える月のような瞳の獣人の青年です。

獣人の父親と人族の母親との間に生まれたそう、それで人族の私に興味を持ってくれたようです。

彼はこの世界で初めて、王女としてではなく私自身と向き合ってくれた家族以外の存在でした。いつものお忍びのための大きくなる魔法を使った姿ではなく、そのままの二歳の姿でここには来ます。なぜなら、彼らが魔法を嫌い、偽りを嫌うからです。

「俺、こしか世界を知らないし、島の外の世界を見てみたいな」

アーサーと出逢つてすぐ、彼はそう私に言いました。

「外の世界に興味を持つ気持ちはずごくわかるな。でも、いい事ばかりじゃないよ？　このように。綺麗事ばかりじゃないし」

私が返すと、夜空を見上げながら彼は続けました。

「母親の故郷に興味あるし、不思議すぎるあんたにも興味ある」

「私に？　たしかにあなたのお母さんの故郷はどんなところかは気になるよね」

「親父も昔は外にいたらしいし……なあ、あんたはなんでそんなに俺らにかまうの？」

「純粹な興味と、なんだろう……アーサー達が純粹で眩しくて、好きな人の事は色々知りたくなるから？」

「なんで自信なさそうに答えるんだよ」

呆れた顔で笑われてしまいました。

「うーん。アーサーが外に行きたいなら、うちで働く？　アーサーの強さなら私のお手伝いしてもらいたいし」

「働きたい！　あんたの事手伝う！」

ちょうど私は《防御シールド》《位置特定》の魔法を施した銀色の指輪をしていました。私の指のサイズではアーサーには小さいので、魔法でサイズを大きくします。

「それは？」

「これに《認識^{にんしき}障害^{そがひ}》の魔法を施して……外の世界で傷ついたりしないように、この指輪をアー

サーに贈ってもいい？」

「あのさー、装飾品を贈るのって特別な意味があるんだけど。あんたなんも考えてないだろ？」

「ごめん！ 深く考えてなかった」

反射的に答えた後、盛大に笑われました。

まだまだ、知らない事が多いんだもん。しょうがないじゃん！ と心の中で抗議の声を上げます。
「あんたがくれるって言うならもらっておこうかな」

手を差し出したので、サイズが合いそうな中指に指輪を嵌め^はます。

アーサーが一瞬固まった気がしますが、そう思った次の瞬間には、お腹を抱えて笑っていました。
「あんた本当、天然で怖いね」

この世界で、中指に指輪を嵌めるのは特別な意味はなかったと記憶しています。

そんなに笑わなくてもいいのにと、また釈然としない気持ちで笑い転がっているアーサーを見つめます。

「あー笑った。ありがとうね。あんたに助力してもらわないとここから出られなくて情けないけど。外に出たら、あんた達より強いだろうし任せてよ」

「うん。アーサー達は何日も寝なくて平気なのずるいよ。私もそうなりたい」

「いいだろー。あんたが寝ている時とか見張っておいてやるよ」

そう言いながら嵌めた銀色の指輪を月にかざして笑っています。

「そういえば私の呼び方だけど、公の場じゃなければ大丈夫だけど、外の世界では敬称をつけて呼ばないといけないんだけど、大丈夫？」

「面倒だな。でもそれが外のルールならそれに合わせるよ。公の場以外では愛称で呼んでいいの？」

「もちろん！ 好きに呼んでもらっていいよ」

煌^{きら}めいて見える指輪とアーサーの瞳を見ながら頷きます。

「じゃあ、お嬢^{じょう}って呼ぼうかな」

「え？ お嬢？」

「お嬢」は意外だったので、変な声が出てしまいました。その呼び方は前世の任侠映画などでは聞かないし、今世では初めて聞きました。

小さい子などに「お嬢さん」は聞いた事がありますが。

「そう。これから改めてよろしくな。お嬢」

なんだかくすぐったく感じたし、おかしくも思えて笑ってしまいました。

「うん。こちらこそ、改めてよろしくね。アーサー」

手を出すとしっかり握り返してくれました。そのまま手を引いて立ち上がります。

「じゃあ、リーダーやみんなに話しにいく」

王宮は働きたい意思と家族の誰かのお墨付きがあれば働けます。

他国の人でも、犯罪者でも、亜^あ人でも、誰でも。

そんな色んな人を受け入れる懐の広さは大陸一番じゃないかと思っています。今まで連れてきた人を断られた事ありませんでした。

でも、お父様いわく、「働いていい基準はとても厳しいと思うよ」らしいです。

他とは全く違う基準があるそうです。

アーサーを連れて帰った時は、さすがにびつくりしていました。

それでも、働きやすいように早急に環境を整えてくれました。

生活様式が他の人とは大きく違っているのが、中庭の畑の近くにあった、庭師のための小屋を改造して専用の住居にしてくれました。

そんな食料向上化計画とお忍び散歩に取り組んだ二歳の一年間は、思い返してみると目まぐるしいものでした。

3. 異文化交流しちゃいました

すくすく育って三年の月日が経った今は、異世界生活をますます満喫しています。

三歳にして天才ってみんなから言われています。

なんてったって中身は大人ですし。

「見た目は子供、頭脳は大人」を体現しています。

こんなセリフ、こちらの世界の人は誰も知りませんけど。

「レイチェル、畑にしゃがんで何をしているの？」

振り向くとそこには、銀の髪飾りで括られた金髪が輝く、お兄様が立っていました。お兄様は絵画から抜け出したかと思うほど、完璧な美少年です。

優しく笑いかけてくれますが、目は笑っていないくて怖いです。

でも、そんなお兄様も最近はお腹を抱えて笑ってくれたりします。

ただ、作り笑いではない笑顔を初めて見たのが、私が産まれて初めて大泣きした時というのは思い出しても釈然としません。

お兄様の笑いのツボは未だによくわかりません。

お兄様は後ろに騎士を二人連れて近づいてきます。

ただ庭を歩いている何気ない光景すら、綺麗で眼福がんぷくです。

「カイルお兄様、おはようございます」

礼儀正しく、カーテシーをします。

歩けるようになってからは、今までの生活では必要なかった、王族のマナーなどを習得するため勉強をしまくりました。カーテシーもその賜物たまものです。

貴族のマナーは単なる形式などではなく、その人の生き方や価値観が反映されるそうで、私はま

だまだ経験不足が否めません。

素敵なお手本である家族がいるので、これからも猛烈に勉強します！

私とは違って、お兄様はまだ五歳なのに、もう勉強が必要なのでは？　と誤ってしまふほど、マナーやルールを完璧に習得しています。

「今は、農作物の品種改良の進展具合を確認していました」

三歳児の口からはおよそ出ない単語でも、カイルお兄様は特に驚きません。

「また新種を作るのかい？　レイチェルは研究熱心だね。朝早くから偉いね」

そうやって今度は心底おかしいと思っている笑顔を向けてくれます。

優しく頭をなでなでされると、だらしなく口元が緩んでしまいます。

「カイルお兄様は、朝の運動ですか？」

お兄様の後ろに続く騎士が持つ、使い込まれた木剣が目に入ります。

毎日鍛錬を欠かさないお兄様に感心してしまいます。

頭がとてもいいのに体も鍛えていて、文武両道なんて素敵です。

お兄様と談笑していると、庭園の方から話し声が聞こえてきました。

お父様しか使わないお母様の愛称が、甘い声色と一緒に聞こえてきたので、すぐに声の主がわかります。

「あなた、今日も無理せず、執務頑張ってください」

「エリー達の笑顔のために、今日も頑張るよ」

お父様はお母様の頬に唇でそっと触れました。

エリーというのは、お父様だけが使うお母様の愛称です。

人払いしているのか、庭園を二人だけで寄り添いながら歩いています。

ラブラブな二人が眩しくて、私はつい目を細めて見てしまいます。

日本では挨拶のキスなどまずしないし、あまりラブラブな両親を見た事がなかったので、未だに違和感を覚えてしまう今日この頃です。

絵画のように美しい二人の姿は、アニメをリアルで見ているみたいで楽しめますが、日本人の感覚が抜け切れていないので、両親のスキンシップを見て恥ずかしくなってしまうです。

「今日はアラール連合国の大使と謁見予定だ。後でエリーも挨拶に顔を出してくれると嬉しい」

「はい。到着の報せがありましたら向かいます」

話題に出たアラール連合国とは、前世という中東のような文化の国で、服装が特徴的です。

歴代一の女性好きと噂の王様は沢山の女性を奥さんにしていて、三十五人も子供がいるみたいです。

アラール連合国は、近年環境問題が深刻で、食料自給率がクリスタ王国と違って低いですが、豊かな鉱山資源や、そこから採れる貴金属の加工技術は大陸で頭一つ抜けていると言われています。習った事を思い出していると、二人がこちらに近づいてきました。

二人は、私とお兄様を見つけると優しく微笑みました。

お父様の赤髪とお母様の金髪が、朝日を受けて煌めいています。とても綺麗です。

本日の服装は、お父様が濃い赤の重厚な布に銀色の薔薇の蔓が刺繍されたマント。

お母様は同じデザインの銀の蔓の刺繍になっている新緑色のドレスでお似合いです。

アクセントにつけられた首飾りも、薔薇の蔓をモチーフにしている存在感を発揮しています。

しかし、首飾りの宝石以上に髪が輝いて目を楽しませてくれます。

「私の天使達、おはよう。今の話、聞こえていたかな？」

お父様は朝日より眩しい笑顔で笑いかけてきます。

なるべく食事を家族四人で揃ってとる仲良し家族の私達が、今日は朝食の前に偶然会えました。

私は朝の時間に毎日畑に来るわけではないですし、お兄様も普段は稽古場にいるはずで。

お父様、お母様にいたっては、忙しいので朝のお散歩などなかなかできません。

ちなみに、公の場ではない場合、お父様とお母様は私達を常に天使と呼びます。

私が「天使ちゃん」で、お兄様が「天使」と呼ばれています。

もう慣れましたが、何歳までこのままなのだろう？　と疑問に思う事があります。

「アラール連合国の大使とは、ワリード大使ですか？」

周辺国の外交官の名前を頭の中から引つ張り出して聞いてみます。

王族として、近隣諸国の王族や偉い人の名前は一通り記憶しています。

前世には古の賢人が残した「無知は罪である」という言葉ありましたが、知識がない事で対応できない事態にならないように、あらゆる勉強をしているところです。

「そうだよ。天使ちゃんが開発した新種野菜を輸入したいそうだよ」

お父様は朝日より眩しいダンディースマイルで、紡ぎだされる声も爽やかです。

「今日は、大使の御子息も後学のために同行するそうだ。なので、天使達も挨拶してくれるなら、

エリーと一緒においで」

御子息か……父親に付いて外国に来るなんて、勉強熱心だなと感じします。

この世界はまだ気軽に他国に行ける世界ではないので、国を越えて移動するのは、ハードルが高いです。

アラール連合国は食料を輸入に依存しているので、そういった交渉もあるのだらうなと思いますしながら、私達は食事室に向かいます。

その道中、他にも学んだ事を思い出します。

アラール連合国がクリスタ王国と大きく違っているのは、奴隷身分の方が多くいて、身分差別が色濃いところです。

日本で育った私には馴染みがないですが、こちらの世界には上流階級意識や身分差別意識は根強く存在します。

この国にだって貴族優位の風潮はあり、平民を軽んじる貴族は少なからずいます。

でも、アラレ連合国と違って、奴隷は禁止されています。

お父様とお母様は最高権力者だけど、ほんわかしていて差別意識なしの平和主義者です。

日本の差別なし文化で育った私は、二人のこのスタンスが大好きです。

こんな幸せな環境に転生できて本当に運がいいと思います。

前世の記憶があつて、魔法の能力を有していても、殺伐とした家庭環境だったらしんどかったと思います。

この国は現在、黄金の時代と呼ばれるほど栄え、それを治めるお父様は賢王と評判で、諸外国から太陽王と呼ばれています。

王様イコールダメ男で戦争したり圧政したりと無能な印象があつたんですけど、私のお父様はそれに全く当てはまりません。

毎朝、会議をして、毎年、法の整備をして、日々国民の生活を豊かにしようと懸命に取り組んでいます。そんなところを心の底から尊敬しています。

そして、お母様とラブラブ仲良しです。

王族と言えば、政略結婚が当たり前で、王妃以外にも女の人がいってドロドロの昼ドラ的展開がありそうですけど、そんな事ありません。

本当に憧れの夫婦です。

そんなお父様が愛するお母様は、公爵家出身のお嬢様ですが、自身で子育てをして、女神のよう

な外見を持つ、優しくて寛容でお淑やかな尊敬できる女性です。

そんな二人の愛の結晶第一号、美少年で賢く、笑顔がデフォルトのお兄様。

口元は笑っているのに目は全く笑っていないお兄様ですが、そんな腹黒なところは家族にしか見せません。

家族大好きで、妹の私をとても可愛がってくれます。自慢の素敵なお兄様です。

魅力的でそれぞれ尊敬できる大好きな家族のもとに産まれて早三年。

実は色々ありました。

喧嘩したり、我儘言ったり、命を狙われたり……

そりゃそうですよね。

日本に生まれた一般人の二十八年間で色々あつたのだから、三年とはいえ王族ならなおの事、様々な事件が起こります。

だからだろと考えてしまいましたけど、中庭から何事もなく食事室に到着しました。

毎日の楽しみである朝食が、目の前に運ばれてきました。

本日の朝食は、彩り野菜のシーザーサラダと、トマトみたいな異世界野菜を使ったミネストローネ風スープ、それとふわふわの白いパンでした。

やっぱり美味しいご飯は最高です。

料理人さんや食事に関わってくれた全ての人に、美味しいご飯をどうもありがとうと心からの感

謝を贈ります。ちなみに、メニューを考案したのは私です。

前世の覚えている限りのレシピを書き出して、料理人さんに再現してもらっています。美味しい食事を楽しみながら、散歩の時に打診された今日の予定の打ち合わせをしました。

その結果、貿易交渉の後に、お兄様と一緒にワリード大使に挨拶する事になりました。

三歳児でも王族として、衣食住を保証してもらっているのです、ちゃんとその分国のために働きます！

普通は王女や王子でも、三歳や五歳では他国の大使の謁見に同席しないようですが。

しかしながら、そこは規格外のお兄様と私です。

私達をモデルにした「王の杖と宝玉」なんていう劇の演目が作られるほど優秀だと巷で言われています。

美味しくて幸せな食事を終えたので、謁見の時間まで、今日も自室で勉強を頑張ります。

しばらく勉強していると、大使到着の連絡がきました。

急いで盛装に替えて部屋を出ました。

本日の服装は、お母様譲りの煌めく金髪と空のような瞳に映える、空色のドレスです。

前世では着た事がない服を毎日着られるこの生活を楽しんでいます。

毎日ドレス選びをする日が来るなんて、前世では想像した事ありませんでした。

部屋を出て、侍女と護衛の騎士をまるで医療ドラマのように後ろにぞろぞろ引き連れて歩いていると、庭園の方から声が聞こえてきました。

王宮の庭園は王族や来賓しか使いません。一般開放している部分もありますが、こんな王宮の奥にはありません。

怒鳴り声も聞こえたので、私は騎士だけを連れて声がる方に進んでいきます。

そこで目に飛び込んだできたのは、何人かの大人の背中と、それを従える一歩前に出ている少年が、抜き身の剣で亜人の少年を斬りつけている場面でした。

目にした瞬間、私は思わず声を上げます。

「何をしているのですか!？」

その場にいた全員が一斉に振り返ります。ビックリ顔です。

いや、こつちがビックリです。

明らかにクリスタ王国の者ではない服装をしています。

前世でいうと、中東のアラブ系の人を思わせるようなローブです。

その服装を見て、アラール連合国の大使の御息と、お付きの人達だと推測します。

一歩前に出ている少年は、年齢からワリード大使の御息でしょう。

しかし、その装飾品を見ると、王族の方の気がしてなりません。

もしやお忍びで王子様が来ているのではないかと疑います。

やはり、こんな時も勉強で得た知識が本当に役立つし大切だと実感します。

浅黒い肌に長い絹のような黒髪を一つに束ねていて、毛先は情熱的な赤色が煌めいています。

アラール連合国の特産品だと一目でわかる精巧な作りの髪飾り、宝石が輝く耳飾り、輝いて見える首飾りに加え、腰の装飾具まで身につけています。

金で統一している装飾具の素晴らしさから、一目で身分が高いとわかります。

奥で追い詰められている亜人の少年は、獣人族のようです。

真つ黒で立派な立ち上がりの耳と、フサフサの尻尾が見えます。

原形を留めていない破れている白いシャツが血で赤く染まっけていて痛々しいです。

さらに、異様にやせ細っているのが遠目にもわかります。

亜人は数が少なく、限られた場所にしか住んでいません。

一般的に、人族が治めている国にはいません。

それは、やはり差別や迫害があるからです。

自分と違う人を忌避してしまうのは、悲しい事に前世も今世も変わらないです。

さらに差別に拍車をかけている理由に、亜人達がとても優秀な点が挙げられます。

人族は遠く及ばない知恵や能力を持っています。

自分より圧倒的に優れている少数民族。

人間の傲慢な方達が、劣等感により迫害する事は容易に想像ができます。

しかし、私はそんな事はできません。

擬人化大好き日本人。

ケモノ子大好き日本人。

人種のサラダボウル日本。

日本人は細胞や無機物の刀まで擬人化して愛せます。

人型じゃなくても、どんな姿でも愛せちゃうのが日本人だと思います。

脳内で他の事を考えて冷静さを取り戻そうとしていると、御子息がスツと歩み寄ってきて、素早く顔を伏せて片膝をつき、挨拶してくれます。

「これは失礼いたしました。クリスタ王国の宝玉、レイチェル様とお見受けします。お目汚し申し訳ありません。ワリード・ザハルが息子、サルーンと申します」

取り巻きの大人達も少年に倣って一斉に平伏しました。

他国の王宮の庭で剣を振り回すとか常識なさすぎだけど、どうやら挨拶はできるみたいです。

挨拶なんてしないで、今すぐ問い詰めたいところだけど、我慢します。

それに、ワリード大使の息子と名乗りましたが、身につけている装飾具や周りの態度から王子だと改めて推測します。

年齢と身体的な特徴から見て、第四王子のサルーン王子が一番疑わしいです。

どちらも名前がサルーンだから、ややこしいところです。

この世界はある慣習で同じ名前の人物が多いので、呼び分けないととても混乱してしまいます。「初めまして、サルーン様。レイチェル・サン・ヴィクトリアです。王宮では、抜剣行為は禁止されています。他国の方でもそれは同じです。何をなさっていたのですか？」

「はっ、連れてきた亜人の奴隷が逃げようとしたため、少々騷しづめをしていました」

「少々しづめの騷しづめですか……とてもそんな風には見えませんが」

「我が国では常の事ですので、口を挟まないでいただきたいのですが」

お互いに敬語を使用していますが、圧倒的に空気が悪いです。ピリピリしています。

私は視線を一瞬木の上に向けて小さく頷きます。そこにいる彼が今にも飛び出してきそうですが、私の意図を汲んで我慢してくれたようです。

目線を地上に戻すと、獣人は血だらけの破れたシャツ姿で、身体を小さく丸めています。悲惨すぎます。ありません。

いくら悪い事をしたとしても、許せません。

ここは王族の権力を発揮する事にします。

「他国にいる場合、その国の法や規則を遵守じゅんしゅしなければならないのは、たかだか三歳の私でも承知しています。まさかサルーン様がそんな事もご存知ないわけありませんよね？」

あえてキラキラ天使スマイルで言います。あんな馬鹿!? という意味を込めて。

「もちろん承知しています。しかし、こちらは奴隷制度がないので、奴隷の騷しづめについて該当する規

則はないのではないのでしょうか？」

おっと、言い返してきましたよ。

何も知らないのに、こちらのやり方に文句言うなど……

私は思わず、爪が掌に食い込むほど手を握り締めてしまいました。

「アラール連合国では奴隷が主人から逃走しようとした場合、鞭打むちうちち五十回か逃走防止のための再度の奴隷印付どいふい与よだったと記憶していますか？」

三歳児でも勉強大好きっ子です。他国の法や規則も網羅もうらしています。

舐なめないでいただきたいです。

「……そうですね。少々騷しづめに熱が入りすぎてしまったようです。申し訳ありません」

三歳の小娘に口で負けて悔しいのか、膝に乗せている拳が震えているのが見えます。

羞恥しやうちなのか怒りなのか、顔を赤くするサルーン様を横目に、私は悲惨な状況の獣人さんに話しかけます。

『大丈夫ですか？』

私が言葉を発した途端、全員が顔を勢いよく上げて、一斉にこちらに視線が集まりました。私が口にしたのは大陸の民族が使用している共通語ではなく、獣人語です。

それを聞いた獣人さんは耳をピクピク動かしただ後に、無言で頷いてくれました。

『なぜ、逃げようとしたのですか？』

「……違います。そんなつもりはなくて、仲間の匂いがした気がしたので、嬉しくて……ビククリして飛び出してしまったのです……」

少し迷った様子で間が空いた後、彼は共通語で答えてくれます。

どうやら獣人語は話してはいけないと命令されているみたいです。

サルーン様達は獣人語がわからないようで、変な顔でこちらを見えています。

彼らが特別無知なわけではなく、この世界のほとんどの人は獣人語を理解していないのです。

私が聞いた事のない言葉を突然話し出したので、頭がおかしくなったとも思っているのかもしれませんが。

「というわけみたいですが、誤解は解けましたか？」

サルーン様を振り向きながら問いかけると、呆気にとられていた顔を急に怒気を孕んだ表情に変えて立ち上がりました。

「この嘘つき駄犬が！ クリスタ王国の王宮に、獣人がいるわけないだろ!!」

サルーン様が語気を荒らげながら、拳を振り上げました。

そんな暴力を黙って見ている私ではありません。

魔法で瞬時に《身体強化》を施し、その腕を掴みます。

本当、人間の傲慢さって嫌になります。

自分より弱い立場の人を作って好き勝手して……奴隷制度なんて本当はみんなにやめてほしい

です。

でも、他国の長い歴史の柵を断ち切るのは難しいでしょう。

いつか我が国が大陸中に貢献できる何かを成す事ができたら、みんなも話を聞いてくれるかもしれません。

サルーン様の腕を掴みながら、彼の瞳を真っ直ぐ見つめます。

「今回彼を連れてきたのは、なんのためですか？ 意味もなく連れてきたんですか？」

その問いにサルーン様は歯切れ悪く答えます。

「カイル殿下に見ていただこうと思って……」

理由になっていない返答に呆れてしまいます。

私の手から抜け出そうともがくの一向に動かせないままの腕を、サルーン様は驚きの表情で見つめています。

「この場で、彼を私にお譲りください」

「はあ？」

サルーン様が間拔けな声を発しました。

さすがに敬語使おう？ と思わず呆れてしまいます。

「代わりに後ほどサルーン様がほしいと思う物を提供させていただきますから」

「ご存知ないのかもしれませんが、奴隷は奴隷印での契約をしているので、奴隷印の書き換えをし

ない限り権利譲渡はできませんよ？」

「常識ではそうですね。でも、私は奴隷印を消せるので問題ありません」

また全開の天使スマイルで、堂々と言ってやります。

「消す!? 奴隷印を!？」

サルーン様が焦ったように、先ほどより大きい声を出します。

理解できないのもしようがないでしょう。

今までの返答を聞いた限り、サルーン様はあんまり頭の回転が速くないと思いました。

残念美少年だったのか……と思わず心の中で呟きます。

そう、サルーン様は美少年です。

こちらの世界の人々は、顔面偏差値が異様に高いです。

そこもやっぱり異世界の定番なのかな? と考えます。

奴隷印は何百年も前の力のある王様が作った魔法道具で付けられるもので、施されると一生消え

ない魔法とされています。

これは私の大嫌いな《隷属れいぞくの契約けいやく》の一種です。

一度奴隷に落ちると、一生這い上がれないなんて辛すぎます。

残念ながらクリスタ王国にも《隷属れいぞくの契約けいやく》は存在します。

わが国では、そのやり方や施される対象も奴隷印のそれとは違っていますが。

獣人などの希少な種族は、拐かどわかされて無理矢理奴隷にされる事態が極々稀ごくごくまれにあるそうです。

奴隷印には《力の誓約》や《服従の誓約》など様々な誓約魔法が付与されています。

そんな魔法の印は、大きければ大きいほどその力は強くなります。

主人が代われば、その度に奴隷印は新しく刻印されます。

とはいえ、一方的に縛るだけの奴隷印なんて、私は魔法で消せちゃいます。

それと、後々言いがかりなどをつけれないために、《魔法契約書まほうけいやくしょ》を作ってサルーン様にサイ

ンさせようと思います。

この世界には、魔法契約書という、絶対に破れない契約書が存在します。

この魔法契約を破れないのは、私が前世で契約書を交わしたらその約束を破れないと思っているイメージが強い事が影響しているのだと思っています。

それだけ拘束力が強い大事な紙のため、書式が詳細に決まっています。

私はいつでも使えるようにある程度記入しておいた紙を、マイ袍かほんに常時用意しています。

マイ袍とは私だけが使える亜空間魔法道具で、容量無制限の便利袍です。

こちらを常に太ももに着けています。

掴んでいた腕を離してサルーン様のサインをもらい、横を通り過ぎて獣人の少年に近づきます。

怖がらせないように膝を地面について、ゆっくりと少年より低い位置から近づきます。

ドレスの汚れなんて気にしていません。

この姿勢は、サルーン様達には考えられないものなのでしょう。

息を止めて、口をあぐりと開けて見えています。

それでも私は人の目は気にせず、少年にゆっくり近づきます。

目線は真っ直ぐ、相手の瞳から外さずに固定しながら。

『触れてもいい？ あなたの傷を治させて？』

ゆっくり自分の手のひらを彼の奴隷印が押されている胸に近づけます。

血と汗で湿っている胸にゆっくりと触れて、魔力を慎重に流して奴隷印を消していきます。

三つの異なる奴隷印が押されているとわかり、怒りで目の奥がチカチカします。

こんな若い少年が三回も奴隷印を押されたなんて頭がおかしいとは思えません。

奴隷印が消えた時、少年が私の腕に口を大きく広げて噛み付いてきました。

ビックリしつつ、後ろに控えている騎士に、もう片方の手で平気だと合図します。

『大丈夫だよ。あなたを傷つけたりしないから』

体にある痛々しい無数の傷を治しながら、安心してほしくて笑いかけます。

少年にさらに近づくと、痩せすぎて今にも折れそうな手足や、痛々しい複数の傷が鮮明になり、

怒りがマグマのように湧いてくるのを感じました。

その体は、食事をまともに与えられなかった事を如実に物語っています。

私は怒りを抑え、彼を安心させるために微笑みながら沢山ある傷の治療を継続します。

奴隷印があると、他人に危害を加えられなくなるので、少年は私に噛み付けた事に驚いたみたい

でした。噛み付いたまま身動き一つしません。

そんな時に私の腕から一筋の血が滴りました。

『防御シールド』があるのに傷を負わせられるなんて、子供でも顎の力が相当強いのだと感嘆して

しまいます。

あれ？ このシーンって、小さい頃何度も見ただ、好きなアニメ映画の冒頭の名シーンに似ている

など場違いな感想を抱いてしまいます。

『怖くないよ。怯えていただけなんだよね』

その言葉で、微動だにしなかった少年がゆっくり腕から口を離して、自分の歯形が残る傷を申し

訳なさそうに舐めてくれました。その仕草が可愛すぎます。

『あなた、お名前は？』

『……駄犬』

間を置いた後に、初めて獣人語で返答してくれました。

いくら奴隷でも、名前が駄犬だなんて信じられません。

「彼はいつからサルーン様の所にいたのですか？ 彼の名前はなんといいますか？」

振り返ってサルーン様に問います。

「……確か、奴隷商人が連れてきたのは、一年ほど前だったと思います。それ以前の事は知らない

です。私はずっと駄犬と呼んでいました」

その返答に唖然としてしまいます。

獸人を奴隷にするには、その身体能力の高さゆえに生後間もない時期でないと難しいと聞いていました。つまり、自分の名前も覚えていない時に奴隷にされたんだろうと思いつて、また怒りが湧き上がります。

私は膝をついた姿勢のまま少し離れて、誠心誠意の謝罪の気持ちを込めて頭を下げます。

この場の全員に聞いてほしいので、ここは共通語で話します。

「人族があなたに酷い事をして申し訳ありませんでした。心からの謝罪を……謝って許されるわけではありませんが」

サルーン様達は引き続きボカーンと口を開けたまま私を見えています。亜人に頭を下げる王族なんて天地がひっくり返ってもありえないと思っている様子でした。

「あなたは自由になりました。どこに行ってもよいのですが、先立つ物がないのであれば、こちらの王宮で働いてみませんか？」

「……」

少年は混乱しているようで返答がありません。

少年は幼い頃から奴隷として過ごしていたために、色々この世界の事情がわかっていない可能性が高いです。

普通であれば、獸人の子供は群れの中で、守られて大切に育てられます。

獸人は群れで行動していて、何かの理由で産みの親が育てられない時は他の大人が世話します。

獸人の性質上、育児放棄などは考え難いです。

「先ほどおっしゃっていた、あなたと同族の方もここにはいますから、彼に話を聞いてからその後の事を決めるのでも結構ですよ……」

その発言に、少年もサルーン様達も、驚いた表情をしました。

サルーン様は今日表情筋の筋肉痛に見舞われるかもしれません。

ずっと表情が大きく動いているのを見てそう推測しました。

先ほどから気配のある、木の上に向かって私は声を掛けます。

「アーサー、下りてきてもらえますか？」

木の上から、葉っぱと共に銀髪のニタニタ笑いの青年が下りてきました。

「お嬢、お呼びですかー？」

耳もなければ尻尾もない、どう見ても人族で、短い銀髪、銀色にも灰色にも見える瞳の顔立ちの整った青年です。

「お願いしてもいいですか？ 指輪を外して、彼にあなたの本当の姿を見せてあげてほしいのですが」

「お嬢の頼みならしょうがないなあー」

アーサーは大袈裟にため息をつく、中指に嵌めていた銀色の指輪をヒョイツとみんなの前で取ってくれました。

その瞬間、銀髪の中から同じ銀色の毛に包まれた耳と、腰の辺りから立派なフサフサの尻尾が出現しました。

いつ見てもモフモフしたいです。今の状況も忘れて、ついフサフサ尻尾に目が釘付けになってしまいます。久しぶりにブラッシングしたい気持ちが溢れてきます。

はっ！ そんな場合じゃなかったと慌てて少年の方に視線を戻します。

その時、私の横を黒い影が一瞬で通り過ぎます。

気づけば少年がアーサーに思いっきり抱きついていました。

よほど同族に会えたのが嬉しかったようです。

「チビ、大丈夫か？」

アーサーが優しく彼の肩を擦さすっています。

「俺様、結構ムカついているからこいつらやっちゃってもいいですか？」

アーサーは顔を上げると、サルーン様達を睨にらんで牙を見せます。

実は彼のニタニタ笑いは、マジギレ中の表情です。

そうです。アーサーは今マジギレ中です。

色々思う事があっても木の上で見守っていたので、我慢の限界が近いみたいです。

いきなりサルーン様達に襲いかかったら、どんな理由でもアーサーが悪者扱いされます。

そんなの絶対嫌だから、私は頭を左右に振ってアーサーを止めます。

とはいえ、私も怒りが限界に近いので、しっかりと瞳を見つめながら宣言します。

「アーサーの分も倍返しするので、ちょっとこの場は我慢してもらってもいいですか？」

私もとても怒っています。

これは王族の権力を発揮する案件です。

しかし、それよりも先に、持っていた腕輪に魔法を施して少年に渡します。

「これはアーサーの指輪と同じ効果があります。馬鹿な人族やまづに煩わづわされないために、よかったら使ってください」

少年は抱きついているアーサーの足から少し顔を離して振り返ると、赤くなった目を隠しながらその腕輪を受け取ってくれました。

「チビ、お前、名前がないならお嬢にとりあえずつけてもらえよ。名前がないと呼びにくいし、お嬢は名付けのプロだから」

アーサー……勝手に名付けのハードルを上げないでもらいたいです。

でも、ぜひ名付けたいです。
少年はアーサーの足に抱きつきながら頷いてくれました。

私はゆっくり近寄りながら、優しくアーサーの足こを彼を抱き締めます。

「名前は、テトはどうかしら？　夜空って意味なんだけど……あなたの素敵な黒毛にピッタリだなと思って」

少年がゆつくりと頷いてくれました。了承をもらえて嬉しくなります。

この世界の少数民族語で、テトは夜空という意味です。

少年の容姿にちなんだ名で、ピッタリだと思います。

ガリガリの小さな体を壊れないようにそっと抱き締めます。

こんな小さな体で一体どれだけの悲劇を身に受けてきたのか考えると、目頭が熱くなります。

テトの耳元でお願いして、触れている体に《読み取り》の魔法を発動して彼の痛みや、これまでの記憶を読み取ります。

《読み取り》の魔法は前世のサイコメトリーや走馬灯などのイメージの応用で考えました。

強く印象に残っている出来事がスライドショーのように頭に浮かびます。

あまり使用しないと決めているのですが、今回はこの後のために必要なので発動します。

テトの感じてきた痛みや苦しみ、私の中に流れ込んできます。

想像以上の苦痛に眉間に皺が寄って、足に力を入れないと立っていただけません。

テトは人族の私に抱きしめられて嫌悪感を覚えるだろうに、腕の中で大人しくしてくれています。場違いな感情ですが、その姿が言葉にできないくらい可愛いです。

子供の獣人さんとお知り合いになれるなんて奇跡的です。

《読み取り》が終わったので、彼の事はアーサーに任せて、謁見の間に行くためにしぶしぶ離れます。

そして、サルーン様とは、アーサーの事を他言しないように魔法契約書を交わしておきます。

彼らにはこの後、撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ!!”を体感してもらおうと思っています。

まだ少年であるサルーン様なら、意識改革ができるかもしれないので、この機会に違う価値観に触れてもらおうと思います。

4. 意識改革しちゃいました

さてさて、先ほどの庭園から場所は変わって謁見の間です。

他国の賓客ひんきやくを招く場合や、一般の国民との面会が行われるその部屋は、中ほどに階段があり、長方形の空間です。

そして沢山の人を収容できる十分な広さがあります。

この謁見の間は、全体が白亜の大理石で作られています。とても豪華で華麗な空間です。ゴテゴテの装飾はなく、アクセントに国花である薔薇のモチーフが施されています。

玉座にはお父様が座っています。

その後ろには、ゆうに五メートルはあるクリスタ王国の国章のタペストリーが掛けられていて、お父様の威厳を感じさせる作りになっています。

そのタペストリーを背景にして、玉座を囲むようにお母様、お兄様、私が並んで立っています。そこから少し離れて、我が国の大臣や宰相達が横並びに並んでいます。

並ぶ前、遅れて謁見の間に入った私とサルーン様を見て、お父様達は瞬時に何かあったのだと察したようで、にやりと笑っていました。

汚れていたドレスは魔法で元通りで、何も変なところはないはずなのに気づくなんて、さすがお父様達です。

私達が入った時には、国同士の大事な話や貿易交渉はすでに終わっていて、和やかに談笑をしているところでした。

サルーン様は後学のためという名目で来たはずなのに、貿易交渉に同席していないなんて、後学の意味がないのではないかと今更ながら思っていました。

和やかな会話が続きませんが、私のこのマグマのような怒りを収めるためには、建前ばかりの会話なんて今は論外です。これはもうしゃしゃり出るしかありません。

一段落したであろうタイミングで、私は笑顔で挙手します。

「アレクサンダー国王にお願いしたい事があります。ワリード大使に私個人として、交渉をさせて

いただいてもよろしいですか？」

お父様は私の顔を見ると優しく微笑みます。

その笑顔はわけ知り顔で、きつとお父様には私の頭が、怒りでマグマのようになっていた事はお見通しなのでしょう。

生温かい笑顔のお母様とお兄様も、すでにわけを知っているみたいな顔をしています。

そういう事であれば、もし私の行動が国際問題になりそうなら三人が上手く止めてくれるでしょう。

「ワリード大使が許可をしてくださるなら認めよう」

お父様は頷きながらそう答えてくれました。

ワリード大使は新緑の髪色の短髪のイケメンさんです。緑の髪とか素敵すぎます。

ちなみにワリード大使もサルーン様も今はローブ姿ではありません。今はローブを脱いで、中に着ていたとても素敵な民族衣装です。

ローブはマントのような用途で、サルーン様は謁見の間に入る時に衛兵に預けていました。ワリード大使が、他の使節団の面々と顔を合わせて頷き合っています。

「クリスタ王国の宝玉であるレイチェル様からのお話、ぜひ喜んでお聞きしたいと思います」

「ワリード大使、どうもありがとうございます」

私はお父様にアイコンタクトをして、カーテシーをして玉座の前の階段を下ります。